

神里雄大／岡崎藝術座が12月にペルー・メキシコで初公演 ～『+51 アビアシオン, サンボルハ』を通して日系移民のルーツを巡る旅～

国際交流基金は、12月、ペルー・メキシコにおいて、岡崎藝術座の舞台公演『+51 アビアシオン, サンボルハ』を主催します。公演団を率い、作・演出を務める神里雄大氏はペルー出身で、本ペルー公演は日ペルー交流年（ペルー日本人移住120周年）を記念する事業の一環として開催されます。

タイトルの『+51 アビアシオン, サンボルハ』は、神里氏の祖母が現在も暮らすペルー・リマにある地名が由来です。神里氏は制作にあたり、南米や、父方の故郷である沖縄をめぐる2か月間の取材を敢行。自身のルーツと真正面から向き合う中で生まれた本作は、主人公「わたし」が日系移民の歴史やアイデンティティに触れる旅をするストーリー構成となっています。今回、作品ゆかりの地で公演を開催することで、主人公の軌跡を辿り、故郷を離れ遠くの土地で生き残った移民たちの物語に寄り添います。

岡崎藝術座の描く新時代の作風が観客の心を開き、日本とペルー、メキシコの文化交流がより一層深まることを期待します。



『+51 アビアシオン, サンボルハ』@ST スポット (2015/横浜) ©富貴塚悠太©Yuta Fukitsuka

記

事業名称：神里雄大／岡崎藝術座『+51 アビアシオン, サンボルハ』

開催日程：2019年12月13日（金）・14日（土）会場：メキシコ／ベニート・ファレス劇場（メキシコシティ）
2019年12月19日（木）・20日（金）会場：ペルー／アリアンス・フランセーズ・リマ（リマ）

作・演出：神里 雄大

制作：株式会社 precog

主催：国際交流基金

共催：メキシコ市立劇場

協力：在ペルー日本国大使館、在メキシコ日本国大使館

この件に関するお問い合わせ：

国際交流基金 コミュニケーションセンター（広報担当：熊倉、原田）

Tel: 03-5369-6075 / Fax: 03-5369-6044

E-mail: press@jpf.go.jp



自身もペルーに
回ると今
ベトナムに
神里氏が
を保持して
みまします！



■公演について

日ペルー交流年（ペルー日本人移住 120 周年）にあわせ、ペルー・メキシコにて舞台公演を実施する。公演団である岡崎藝術座は、2016 年に本作をもってフランス、ベルギー、オーストラリアなどの国際的な舞台芸術祭に招へいされるなど、国内外で注目されている。出演者には、ダンサー・振付師の振子びじん氏、俳優の稲継美保氏、福永武史氏といった才能豊かなメンバーを迎え、公演団初となる南米公演を実施。

■あらすじ

東京の人混みの中、政治にも社会にも絶望して、何をしたいかわからなくなっている若い演出家のもとに、大正時代、東京で演出家として活躍し、その後メキシコに亡命し、現地で演劇学校をつくらせたセキサノの亡霊が現れ、若い演出家を叱咤する。彼らは若い演出家の家系がある沖縄へ向かい、墓まいりのあと、基地移設反対運動の様子を見る。その後、多くの沖縄人や日本人が移住したペルーまで旅をし、そこで私財を投げ打って高齢者となった移民者のための施設を建てた神内良一のエピソードを知る。演出家であることをやめた若者は、絶望とも希望ともつかない様子のまま、ペルーの街に消えていく。小道具はすべて出演者のスーツケースから出現し、観客と一緒に旅をしていくような作品。

■神里雄大氏からのコメント

この作品は、2 年前にインドネシアでいったん終りを迎えました。今回、メキシコ、ペルーと、この作品で重要な舞台となっている土地で上演できることとなり、現在、沖縄は那覇にてリハーサル中です。沖縄もこの作品で重要な舞台です。キャストはすべて替わり、5 年前に書いた作品に取り組んでいます。この数年でわたしたちがどう変わってきたのか、なにがなされ、なにが悪くなってしまったのか、そんな話をしながらリハーサルをしています。新しいキャストは、それぞれ、東京、京都、沖縄を拠点に活動する方々で、活動拠点に限らず、その時々で都合のいい場所に集まって創作ができればいいと思っていたので、今回図らずもそれが実現しました。11 月中旬からは東京にリハーサルの場を移します。できるだけ多くの会話や議論をしながら、この作品の新しい姿を見てみたいと思います。

■プロフィール

神里 雄大（作・演出）

1982 年、ペルー・リマ生まれ。作家・舞台演出家。10 代の数年をパラグアイ共和国、アメリカ合衆国などで過ごす。2006 年『しっぽをつかまれた欲望』（作：パブロ＝ピカソ）で利賀演出家コンクール最優秀演出家賞受賞。2018 年には、『バルパライソの長い坂をくだる話』で第 62 回岸田國土戯曲賞を受賞。

政治や社会情勢への態度を積極的に作品に反映させながら、わかりあえない他者との共時性をテーマとした作品を発表している。2016 年 10 月より、文化庁新進芸術家海外研修制度研修員としてアルゼンチン・ブエノスアイレスに 1 年間滞在した。2011 年度～2016 年度公益財団法人セゾン文化財団ジュニア・フェロー。



振子 びじん（出演）

2004 年まで舞踏カンパニー大駱駝艦に所属し、磨赤兒に師事する。舞踏で培われた身体を元に、自身の体に微視的なアプローチをしたソロダンスや、ダンサーの体を物質的に扱った振付作品を発表する。2011 年、横浜ダンスコレクション EX 審査員賞、フェスティバルトーキョー公募プログラム F/T アワード受賞。2016 年、Our Masters 土方巽「異言/glossolalia」キュレーター。京都在住。生活にダンスの杭を打ち込むべく「ダンサーズ」を主催し、定期稽古を行う。



©島崎ろでいー

この件に関するお問い合わせ：

国際交流基金 コミュニケーションセンター（広報担当：熊倉、原田）
Tel: 03-5369-6075 / Fax: 03-5369-6044
E-mail: press@jpf.go.jp



HARADA

自身も
ペルー
ベトナム
回ル。今
神里公演
に満ちる
みを持し
ます！
臨



福永 武史 (出演)

1973年、大阪府生まれ。1975年～1977年を徳島県で過ごし、1978年より沖縄県在住。沖縄大学在学中の1996年より俳優としての活動を始める。2011年、わが街の小劇場という空間を創り、演出家としての活動も行う。2018年利賀演劇人コンクール優秀演出家賞受賞。



稲継 美保 (出演)

1987年生まれ。俳優。東京藝術大学在学中より演劇を始め、舞台を中心にフリーランスで活動中。これまでに岡崎藝術座、サンプル、チェルフィッチュ、ミクニヤナイハラプロジェクト、バストリオ、オフィスマウンテン、坂田ゆかり、東葛スポーツなどの作品に出演。また、2019年にはポーランドの演出家マグダ・シュペフトの新作「オールウェイズカミングホーム」に出演するなど、国内外問わず幅広い役柄をこなし、枠にとらわれない活動を行っている。岡崎藝術座には、これまでに「アンティゴネ／寝取られ宗介」「隣人ジミーの不在」「(飲めない人のための)ブラックコーヒー」「イスラ！イスラ！イスラ！」に出演している。



©Hajime Kato

岡崎藝術座

2003年結成。2006年『しっぽをつかまれた欲望』で利賀演出家コンクール最優秀演出家賞受賞。2012年『レッドと黒の膨張する半球体』で台北アーツフェスティバル、2016年『+51 アビシオン、サンボルハ』でシドニーフェスティバル、フェスティバル・ドートンヌ・パリなど海外招聘も多数。2018年『バルパライソの長い坂をくだる話』で第62回岸田國士戯曲賞受賞。沖縄系ペルー人と北海道系日本人にルーツをもつ神里ならではの想像力で、南米などで採集したエピソードから移民の物語を紡ぐ。



JAPAN FOUNDATION
国際交流基金



AMISTAD
PERÚ - JAPÓN

Embajada del



この件に関するお問い合わせ：

国際交流基金 コミュニケーションセンター (広報担当：熊倉、原田)
Tel: 03-5369-6075 / Fax: 03-5369-6044
E-mail: press@jpf.go.jp



HARADA

自身も
あるル
ッでも
ベッル
回の公
神里氏
を保持
みずす
！